

Asia Oceania Geosciences Society (AOGS)

2023 参加報告

清水厚

(国立環境研究所)

(Received August 7, 2023)

2023年7月30日から8月4日にかけて、シンガポール SUNTEC 国際会議場において第20回アジア・オセアニア地球惑星科学連合年次大会(AOGS2023)が開かれた。同大会は西太平洋周辺の地球惑星科学関連学会の連合体(Asia Oceania Geosciences Society)が運営し、2年に一度はシンガポール、それ以外の年に太平洋西岸の都市において開かれる。コロナ禍でバーチャル開催が続いていたが本年は以前のような対面形式に戻った(講演のオンライン配信はなし)。参加総数は3297名、セッションは7月31日から8月4日まで組まれ、口頭発表は午前と午後に2スロットずつ、うち午後の最後はポスターセッション(ビール提供あり)と同時という形式である。日本から初参加したという火山科学者によれば、JpGUやAGUと比べて固体地球関連のセッションが少ない印象を受けたそうである。筆者はNASA等が主導するMIRA(Models, In situ, and Remote sensing of Aerosols, ちなみに発音は「マイラ」)プロジェクトのセッション(8月3日)に招待され、同セッション内でいくつかライダー関連の発表があったのでここに報告する。冒頭、Trepte(NASA)がMIRAの目的(分野横断型のモデル・観測統合)や将来像を紹介するとともに、2日前の8月1日に17年に渡ったCALIPSOのサイエンスミッションが終了したことを報告した。清水(環境研)は日本国内のライダーによる黄砂とローカルダストの判別に関する発表を行った。M-H. Kim(SNU)はAD-NetライダーとAERONET/SKYNET放射計を組み合わせて行った北東アジア域におけるエアロゾルのライダー比推定について報告し、S-J. Park(SNU)はWisconsin大と共同で2016-18年にソウルで行ったHSRL観測の結果から境界層構造の日変動やMEE(質量消散効率)の推定に関する結果を示した。またSchuster(NASA)はCALIOP解析におけるエアロゾル種類別ライダー比の見直しについて説明した。ライダー以外にも話題を広げると、韓国のGEMSや日本のひまわり等静止軌道衛星からの大気汚染物質の観測に関する発表が目立ち、ラグランジュポイントから地球を観測するDSCOVRの応用例も紹介されるなど、大気汚染監視において低軌道以外の衛星の重要性が示された会合であった。またポスター発表では温暖化シナリオに基づくモデル計算により2030年代までの黄砂発生量年々変動を予測した中国の学生による発表が興味深かった。参加者の顔ぶれを見ると男女を問わず若い世代が多く見受けられ、高齢化に悩む日本国内の学会との差を感じずには居られなかった。次回2024年のAOGSは韓国・平昌(2018年冬季オリンピック開催地)で開催が予定されており、また2028年には二度目の日本開催を福岡に誘致する動きもあると聞いた。大規模な国際学会の中では日本との時差が少ない都市で開かれることもあり、進境著しいアジア域研究者との交流に興味がある方は次回以降の参加を検討されてはいかがだろうか。